

まっすぐな道の真正面に開聞岳が見えている。右側には松並木の向こうに東シナ海が風いである。対向車はなく、ヘルメットのスクリーンの下から吹き込む風にほのかな磯の香りを感じる。2ストローク175cc単気筒エンジンの、最近の国産車には無くなってしまった、軽やかな排気音と独特の鼓動が気分を弾ませてくれる。

今朝の便で羽田から鹿児島に飛び、ネットオークションで落札したこのバイクを受け取った。2・3日、南鹿児島をツーリングして宮崎からフェリーで帰る行程を考えている。

山道を下り海岸沿いの国道226号線にぶつかるT字路の信号待ちで、今夜の宿泊地に予定している坊津（ボウノツ）に直行するために右折するか、少し遠回りになるが開聞岳を観光してから行くか迷った末、左折してきた。薩摩富士と呼ばれ世界でも珍しい『トロコニーデ型』の姿を真っ正面に見たとき、その選択が正解だったことが実感できた。あと5分で山麓にたどり着く。よし、そこで休憩することにしよう。無意識のうちにアクセルが上がる。

北陸地方の大学院を卒業し、今の会社に入り7年目の今年になって初めて新製品開発チームのサブリーダーを任された。パソコン業界の新製品開発競争は激しく、一つの開発が終わっても、ただちに次の開発が待ち受けており、まとまった休暇は取りにくいのが、今年は特別な事情があり新製品を発表した後に10日間の休暇を取ることができた。

学生時代は、どこに行くのにも50ccのスーパーカブに乗っていた。社会人になり自動車を買ってからは、バイクにはまったく興味を失っていた。ところが最近の会社でのゴタゴタ騒ぎが心理的に影響したのだろうか、風を受け、気分がおもむくまま自由に走ることができるバイクに再び乗ってみたいと思うようになっていた。オークション出品者には自分でバイクを引き取りに行くことを連絡しておいた。ナンバー登録に必要な書類は、あらかじめ郵送してもらい、ピカピカの『湘南ナンバー』を取得し、バイクツーリングに必要な装備類と一緒に持ってきた。

過当競争の末、パソコン価格は大幅な値下がりを見せ、俺が勤務する『北松電気株式会社』は、事業回復の見込みがないとの決定を下し、「パソコン事業部」を中国の『新達企業集団』に売却することになり、6月30日付けで社内外に一斉に公表した。同日現在、パソコン事業部に在籍する従業員は、11月からは新達企業集団のパソコン事業部の従業員として同じ待遇で移籍するか、割増退職金をもらって4ヶ月以内に退職するか、選択の余地が与えられた。退職して別の会社に就職することも考えたが、自分でも気に入っているパソコンのハードウェア開発に従事できる会社は、もはや日本にはほとんど存在せず、アメリカや中国の会社になってしまう。迷った末に、移籍を選択し、ぱらぱらと退職を始めた同僚がやり残した仕事を残った者でカバーしながら、このほど新製品の開発を終えたばかりだ。

7月に入って数日が過ぎた頃になって、日頃から『よく考えて仕事せよ』と力説していた部長が、6月20日付の辞令でパソコンとは全く関係がない他の事業部に異動になっていたことが部員に知れ渡った。6月20日は、公表日より前なので、退職か移籍の選択をせずに済み、北松電気にそのまま在籍できることになる。

＜汚え！ 裏から手を回し異動辞令をバックデートさせたんだ・・・＞誰だってそう思うだろう。『よく考えよ』ということは悪知恵のことだったのか。

それまで部長に対して「やり手」として畏敬の念を持っていたが、何となく親しみを感ずることができなかった。＜やはり！＞、俺の直感が正しかったと思うと共に「人生いろいろ」という歌謡曲の題名が脳裏に浮かんだ。社会人になってからは学生時代とは違い様々な人たちと出会い、多くの裏切りや抜け駆けを見てきたが、今回の部長のようにひどい「後出しジャンケン」は初めてだった。

山麓の駐車場でバイクから降り柔軟体操をしてから再びバイクにまたがった。右足でキックすると甲高い排気音をたててエンジンが軽やかに回り始めた。2ストロークエンジンの始動は4ストロークエンジンよりも簡単な上、エンジンからの異音もない。オークションの出品者がバイク店だったので、藤沢まで乗って帰れるよう十分な整備を依頼していたのに応え誠実に実行してくれたようである。マフラーからはき出す混合ガソリンの白い排気ガスの匂いは、子供の頃、よく走り回っていた昔のオートバイと故郷の街並みを思い出させる。

開聞岳をあとにして国道226号線を西に引き返し、颯娃町（エイチョウ）あたりまで来ると、右手には、焼酎には最高の原材料と言われる『黄金千貫』の芋畑が広がっていた。まもなく収穫の時期を迎え、今年の新酒も出回ることだろう。この先、枕崎にある焼酎の蔵元で『さつま白波』を買ってこよう。おみやげを買いすぎるとリュックが重たくなるが、最近の焼酎ブームのおかげで藤沢では芋焼酎が入手難なので思い切って買ってみよう。

枕崎からさらに西に進み、耳取峠の上り坂を、単気筒エンジンの“パッ、パッ、パッ”と聞こえる一発毎の爆発が力強く大地を蹴って駆け上がっているとき、右手の峠に巨大な風車は何基も見えてきた。話に聞いていた『ウィンドテック坊津』の風力発電設備だ。峠の頂で停車し後ろを振り返ると先ほど出発してきた開聞岳が海の向こうに浮かんで見える。前方には今日の目的地である坊津の複雑に入り込んだリアス式海岸とその向こうの大海原が見える。沖縄、台湾、フィリピンと連なる東シナ海だ。前を向いても後ろを向いても雄大な山と海の絶景だ！ 『かごしまロマン街道』と呼ばれるだけのことはある。

前方の道ばたにバイクが止まりライダーが下車し不安そうに後輪を見ている。

「どうかしたんですか？」。俺の問いかけに反応して顔をこちらに向けると、女性ライダーだった。

「パンクしちゃった」

「OK、修理道具を持っているから直してあげるよ」。長距離ツーリングを見越してリュックに修理道具を入れてきたのが早速役立った。

「パンクって自分で修理できるんですね」。修理を見守りながら彼女が話しかけてきた。
「変わったバイクですね。真っ赤なガソリントankかわいい！」。

「スペイン製だから・・・ピカソを生んだ国だからね。先ほどバイク屋で受け取ってきたばかりですよ」

「あれー、『湘南ナンバー』だ」

「今朝、鹿児島に着いたばかりで、ナンバーだけを持ってきたんだ」

彼女は『湘南』に興味を惹かれたようで、「少し先にある吹上浜の砂丘沿いの国道は、湘南海岸の道と似ていると言われているのよ」と言った。

「へー、坊津よりも先なの？」

「先だけど、それほど遠くないわよ」

「パンク、直ったと思うけど、念のためしばらく一緒に走ってあげるよ」。工具の後かたづけをしながら彼女のバイクを見た。

「スズキのポルティーだね。座席が低いから女性にも乗りやすいんだよね」

「別れた亭主から慰謝料代わりに取り上げてきたんだ」

「ふうん、そうなんだ。若そうに見えるけど・・・」

「いい人だったけど、仕事が長続きしなくて、イライラして暴力を振るって・・・だから別れちゃった」

.....

「じゃあ、坊津方向に走ればいいのか」

「いいわよ、どうせ、はっきりした目的地も無いんだから」

二台のバイクが坊津の街に入ってもなく、ツーリングで訪れる観光地としてあらかじめ予定していた『坊津歴史資料センター』が見えたので駐車場に入り二台並べてバイクを止めた。観光シーズンを外れているせいか、広い駐車場には他に自動車一台止まっているだけだった。周りの植栽はよく手入れされており、その向こうの湾内に『双剣石』が見えた。小説『幻化』では、このあたりの浜辺で、軍用ドラム缶の小さな穴から滴った「海軍航空用一号アルコール」を器にすくい取り、兵隊達が酒盛りをし、酔っ払った一人が双剣石まで泳いで行こうとして溺死したと描写されている。遺体はこの近くの国民学校に収容されたことになっている。

「タイヤの状態は大丈夫そうだね。じゃあ、私はここを見学して行くから・・・」

「一緒に見学してもいい？ あてもなく一人で走ってもつまらないから」

「かまわないよ。こっちもきままな一人旅だし」

館内では、丁度、坊津にゆかりが深い作家梅崎春生に関する特別展示が開催されており、未亡人が描いた『幻化よりダチュラ追想』と題する絵画作品が展示されていた。『ダチュラ』は、『朝鮮朝顔』とも呼ばれ、白い花と黄色い花、上に向けて花が咲く品種と下に向けて咲く品種があるが、この絵では白い花が下に向いて咲いているのが描かれていた。この組み合わせが小説のイメージに一番あっている。未亡人は夫の作品をよく理解している

のだろう。

「『幻化』、知ってる。国語の副読本で習ったことがある」と彼女は言った。

「へー、学校でも教えるくらい有名な作品なんだ！ この作品が好きで、鹿児島までバイクを取りに来たのも小説の舞台となった場所を走って見たかったからなんだ」

「確か、小説の最後は、阿蘇山の噴火口に飛び込んで自殺するかどうか、一万円札を半分に切って賭ける話だったわ。高校の授業なんてつまらなかったけど、この小説の時間だけは面白かった！」

「いやー、梅崎作品が好きとは！」

「自殺する、しないほど大げさじゃないけど、離婚するかどうかで悩んだ末、離婚を選んだのだから、わたしもおなじようなものね」

「俺も会社を辞めるか、移籍するかで悩んで、移籍を選択したんだ。俺たち状況が似ているし気が合いそうだね」

「そうね、もっと話したいわ。今晚、同じ宿に泊まってもいい？」

「俺はかまわないけど・・・そちらは大丈夫なの？」

「最後の失業保険金をもらったばかりだし、『気晴らしに一週間ほどバイクで九州一周してくる』と言って実家を今朝出てきたばかりだから、大丈夫よ」

予約してあった坊津でただ一軒の宿泊施設である「寺田旅館」に携帯電話で確認を取ったら、シーズンオフでもあり、彼女の部屋を簡単に追加予約することができた。

「OK、宿の予約は大丈夫だ。近くで夕食を食べてから、旅館に行こう」

坊津の小さな食堂で「刺身定食」を食べて外に出ると、陽は沈み小雨模様になっていた。急いでバイクを走らせ、すぐ近くの寺田旅館をめざした。バイクは雨に打たれないように旅館の物置小屋の中に駐車させてもらった。母屋の前まで戻ると、玄関脇の雑草の葉についた雨滴が門灯の光を反射しガラス玉のように燦めいていた。しばらく晴天が続き元気がなくなっていた草花も、この雨で活力を取り戻すことだろう。この10日間の休暇で俺自身もリフレッシュし、休暇明けの出勤は11月の初めになる。そのとき、会社の看板が『新達企業集団』に掛け替えられているのを見ることだろう。草花も人間も単調に時間を過ごすのではなく変化の中を生きているのがわかったような気がした。

「雨は朝まで降る予報だから明日の出発は遅くなる。買ってきた焼酎があるから飲みあかそう」

「いいわねー、二人で飲むのは何年ぶりかなー。鹿児島の女は焼酎に強いから負けないようにね」

この女はどこまでもついてきそうだ。藤沢のアパートまでついて来るかもしれない。お互いに一つの転機を乗り越え、自分なりの選択をしてしまった者同士、一緒に生活することになるかもしれないが、それもいいかな。 了